

# 帝桐壺にとっての宿曜の予言と冷泉の誕生

望月郁子

## 一 問題提起

桐壺帝の第二皇子（光源氏）は、物語への登場時点で、「世になくきよらなる男御子」で「めづらかなるちごの御容貌なり。」とまず人相を紹介されている。父桐壺帝は、この秘蔵の皇子の処遇を決めるに先立って、倭相・高麗人の観相・宿曜の占いを試みた。高麗の相人は

「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂うることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」

といった。「倭相」の筋とも合い、帝は第二皇子を、皇位継承権のない「ただ人」にする他ないと考えた。高麗人の観相を帝が重視したのは、高麗人であれば、当時の政情の細部―右大臣・弘徽殿女御勢力の横暴―に疎く、政情の現実に左右されず、より客観性に富む観相の結果が得られると見たからであろうか。

「宿曜」の占いについて、桐壺巻では、「宿曜のかしこき道の人に勘へさせたまふにも同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり。」以外語られないが、滯標巻に至って、明石姫君誕生の報せを受けた源氏の心中の語りとして

「宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。…当帝のかく位にかなひたまひぬる（冷泉即位）ことを思ひのごとうれしとおぼす。…」

と証される。

留意すべきは、帝桐壺は、賜姓源氏以前に宿曜の占いの結果を知っていることである。桐壺は帝として宿曜の予言（仏教上の天の声といふべきもの）に背くことは許されない。「ただ人」源氏の子を帝にしなければならぬ。《絶対矛盾》を余儀なくされている。そのつもりで、桐壺巻の終わり三分の一が語る帝の源氏の育て方を注意して読むと、帝が源氏を常に自分の傍らに仕えさせ、自由に里住みもさせず、藤壺と心を通わすように帝が仕向けている。それを糸口として、帝桐壺は、「ただ人」源氏の子を帝にするには、藤壺が生む源氏の子を帝桐壺が皇子とし、帝桐壺が朱雀に讓位する時点でその皇子を東宮に立てる以外に方法はないと判断し、その実現に向けて桐壺巻においても着実に手を打っている<sup>(1)</sup>と見るに至った（「桐壺帝の抵抗・挫折・再起——桐壺巻を帝サイドから読む——」）。

となると、光と藤壺とを暗黙裏に操っているのは宿曜の予言であるとなる。従来専ら《密通》とされてきたことは、単なる《密通》では片付けられない。宿曜（天）が、帝桐壺・光・藤壺に課した《絶対矛盾》、償いを不可欠とする厳しい試練である、となる。宿曜の予言を射程に入れた、帝桐壺・源氏・藤壺の物語の読み直しが必要となる。

『源氏物語』に於いて、宿曜の予言が物語全体の主要plotであること、その実現は人力を越えたもの——天・神仏の論し

―に依らねばならず△夢の告げ▽が重要な役割を担わされていることは改めて言うまでもあるまい。一般に、予言は、それが実現してはじめて証される。読者は、占いがあったこと・夢の告げがあったことは、物語進行途上で知っても、占いや夢の中身は知らされないまま読み進め、予言実現の段階に至って予言・夢の告げの中身を知る。予言・夢の告げに読者はどう対処すべきか。

予言・夢の告げの中身が証されても、それ以前に戻って、実現のために何時何があったかを確かめたり、考えたりするのが普通のものである。『源氏物語』はあくまで巻序をおって読むべきだというのも一つの立場にはちがいない。

しかし、予言・夢の告げの中身が証される時点で、それまでの自分の読みに納得がいかなければ、前に戻っての読み直しをせざるを得ない。

源氏物語の登場人物の意識で我々に理解しにくいものに《宿世》がある。人間の一生の何もかもが「宿世」に集約される感がある。宿曜の予言・夢の告げは、帝・東宮をはじめ、皇統の血筋に現われるのが支配的である。冷泉にしぼって言えば、右大臣・弘徽殿女御のように、臣下が自家の繁栄のために帝の意志を蔑ろにして手段を選ばなくなった時に、宿曜(天)が苦況に立つ帝を守り、皇位継承を導くと見通せそうである。宿曜の予言の顕現化に必要な不可欠なものとして源氏と藤壺との苦しい関係が設定されている。

この小論では、まず、帝桐壺の生前中の守備範囲内というべき冷泉の立太子までを中心に、宿曜の予言と夢の告げを念頭において、予言の既知未知を軸に、冷泉誕生に対する帝桐壺・藤壺・源氏三者の意識―喜びと苦悩―を読み直してみた。次いで、桐壺院の遺言・院崩御後の政変に対する藤壺・源氏の対応と、藤壺死後の夜居の僧都の秘密の証しを読みたい。(源氏の須磨退去・天変については稿を改めて考察したい。)

若い頃から『源氏物語』になじみ、一語一語を丁寧に読んで理解したいと願って来た筆者が、老年に入りかけたここ三

四年、国語学、特に文献学 (philologie, 書誌学ではない) の立場で、先入観をできるだけ排斥し、文献全体即ち五十四帖全体を常に視野に入れつつ、本文に語らせながら、『源氏物語』本文の読みの論を書くようになったのは、△読み落とし▽  
—考え様によってはかなり大きな問題となりそうなものもある—がこの齢になってやっと見つかるとなったからである。繰り返し繰り返しての読み直しをし、あれこれと書いては、問題をより明確に詰めていく。△読み落とし▽は読めていない証拠にはかならない。落ちが見つかる限りは、自分を納得させるために書くということか。  
『源氏物語』の水面下の深さは計り知れない。

## 二 冷泉の誕生

〔一〕 (源氏の藤壺思慕) ①帝桐壺は、亡き母桐壺更衣に藤壺が似ていると二人 (源氏と藤壺) に信じ込ませ、新婚早々の源氏を左大臣邸へ通わせず手許に置き、藤壺と源氏に琴笛を合奏させた。若い二人は「琴笛の音に聞こえ通ひ」、十才にして源氏は「ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましくおぼえたまふ。」となっていた (桐壺)。幼少年時代から源氏にとって父帝は絶対的存在であった。父帝の気持ちがよく見抜け、素直に従う結果、帝のこうあって欲しいと思うレールにすんなり乗ってしまっている感がある。帝のリードでもある。

②雨夜の品定め の長話を聞いて最後に、「君は人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。これに、足らず、また、さし過ぎたることなくものしたまひけるものかなとありがたきにも、いとど胸ふたがる。」源氏十七歳という。思いは藤壺一人へ集中している。

### 〔二〕 (源氏の苦惱—北山の一夜)

①北山で姫君紫を垣間見、「さるは、限りなう心尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と

思ふにも涙ぞ落つる。」藤壺に対する切実感が高まっている。「(藤壺心) あさましかりしを思し出づるだに、世ととももの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに、…(若紫「一二」)」の「あさましかりし」は、当該の源氏の高ぶりと当該②(後述)の意識からして、この北山訪問以前のこととなろう。藤壺は、事は一生つきまとう自分の不覚で、あの時限りで終わらなければならぬと決心している。帝桐壺がレールを敷き、宿曜(天)が源氏を導いたか。

## ②源氏僧都の坊訪問。

「僧都、世の常なき御物語、後の世のことなど聞こえ知らせたまふ。わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき思しつづけて、かうやうなる住まひもせまほしうおぼえたまふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ…(同「六」)」

源氏は藤壺に対して自分のしたことを明確に「罪」と意識し、死後まで浮かぶことはできない、自分を救う道は出家以外にないのでと深刻に受けとめている。「昼の面影」にひかれるのは、藤壺への思いをうまく転化できればという、苦し紛れの期待とでもいうべきか。僧都に「昼の面影」の素性を聞き出す。

僧都が初夜の勤行をしに阿弥陀堂へ上る。源氏一人が残される。

「雨すこしうちそそき、山風ひやかに吹きたるに、滝のよどもまさりて音高う聞こゆ。すこしねぶたげなる読経の絶え絶えずごく聞こゆるなど、すずろなる人も所がらものあはれなり、まして思しめぐらすこと多くて、まどろまれたまはず。…」

「暁方になりければ、法華三昧おこなふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる　いと尊く、滝の音に響きあいたり。」

「吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな」

「さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心は騒ぎやはする

耳馴れはべりにけりや」と聞こえたまふ。(同「八」)

源氏の「夢さめて」は精神が浄化されたと感じ取れての感慨である。

北山でのこの一夜には、紫との出会いだけでなく、僧都を相手に、源氏が初めて体験したであろう山深い寺の夜の、精神の浄化もあった。「わらはやみ」の直接の原因は、収拾のつけようのない自分の行為に対する自覚・苦悩・落ち込みであったか。

### ③ (僧都の源氏への対応)

「(僧都)「あはれ、何の契りにて、かかる御さまながら、いとむつかしき日本の末の世に生まれたまへらむと見るに、いとむ悲しき」とて目おし拭ひたまふ。」

源氏に「帝王」の資質を見て、これだけの人を東宮に立てることのできない現実を「いとむつかしき日本の末の世」と嘆き、時代に受け入れられない源氏を惜しむ。この僧都の時代認識を読み落としてはならない。

「聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに御薬ども入れて、藤桜などにつけて、…捧げたてまつりたまふ。」

「僧都、琴(きむ)をみづから持てまゐりて、…切に聞こえたまへば、…けにくからず 掻き鳴らして…」

僧都は聖徳太子伝来の数珠を所持し、琴(きむ)も坊に置いている。思うに、僧都は皇統の血筋(皇子)ではなからうか。「姉妹(いもうと)」の尼君は垣間見る源氏の目に「ただ人と見えぬ」である。源氏に対して皇統の血筋同志としての最高の贈物を「守り」して与えた。また、源氏に琴(きむ)を弾かす。寺の一夜で浄化された源氏の精神が宿曜に届くか。

「二三」(藤壺懷妊)

①源氏が里下がり中の藤壺と逢う。

「見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな」

「世がたりに人や伝へんたぐひなきうき身を醒めぬ夢になしても」

藤壺は、源氏との仲がゴシップとなって流れるのを恐れる。二人の仲を決して他人に感づかれてはならないと厳しい。「御文なども、例の、ご覧に入れぬよしのみ」である。

源氏は藤壺の突放しを「常のことながらも、つらういみじう思しほれて」二三日宮中に出仕しない。「(帝が)いかなるにかと御心動かせたまふべかめるも、恐ろしうのみ(源氏は)おぼえたまふ。(同「二四」)」源氏の欠勤に対する帝の反応に注意したい。

すでに述べたが、宿曜の予言(前述「一」)を帝が顕現化するには、藤壺が源氏の男子を出産し、それを帝桐壺が皇子とし、桐壺讓位に際し東宮に立てる以外に道はなかったであろう。帝桐壺が、幼い頃から源氏を藤壺に接近させ、若い二人の仲を大切にし、源氏を藤壺思慕に至らせた底に、宿曜の予言顕現化に向けての帝桐壺の決意と覚悟があったと見れば、帝による幼少の源氏教育の特異さの説明もつく。

当該の「(帝が)いかなるにかと御心動かせたまふべかめる」は、秘蔵の皇子源氏の健康を真剣に案じたの意でないとは言いきれないが、宿曜の予言を念頭に入れば、帝にとって重要なのは、帝の期待通りに、藤壺の里下がり中に、源氏と藤壺との間にことが実現するかどうかである。

一方、源氏の「恐ろしうのみおぼえたまふ」は、源氏の藤壺への接近の程度を語るものであり、真相を見破る父の目への恐れである。発覚はともかく、自分で自分を収拾できない「犯し」の自覚である。(この時点で源氏は予言を知らない)。

帝桐壺の情報網は、見当もつかない。源氏を藤壺に導くのは王命婦である。命婦は帝つきの女官名である。王命婦は、帝から「源氏は信用できる」程度の内意を得ていたのではなかったか。幼い源氏に、藤壺が亡き母更衣に似ていると信じ込ませたのは典侍であった。典侍とて帝の指示に従ったことであつたであろう。

源氏の藤壺思慕も、藤壺の懐妊も、従来の見方△密通▽で片付くことではない。帝桐壺一人が承知のルール上のことであり、更に言えば宿曜（仏教上の天の声）の然らしめるところである。そう知っているのは帝のみである。当事者は苦しみ悩まなければならぬ。まずは帝桐壺にそれなりの覚悟がなければできないことである。帝を含む当事者三人に、宿曜によって課せられた受難ともいえそうな試練である。ことに対する反応は三人三様である。

②（懐妊確認） 妊娠三月になつて、藤壺自身が懐妊を確認し、帝に奏上する。

「いとどあはれに限りなう思されて、御使などのひまなきもそら恐ろしう、ものを思すこと隙なし（同「二四」）」  
帝は満足している。藤壺に対する愛情は一入つりの、見舞いの使者を頻繁におくる。

藤壺は「そら恐ろしう、ものを思すこと隙なし」である。藤壺は帝の真意（宿曜の予言）を知らない。源氏の子を懐妊するのは、帝の信頼への裏切り行為である。露見すれば、源氏・藤壺・新生児三者の身の破滅である。類義語モノオソロシが周知の実態があり、それに襲われそうな気持ち、ケオソロシが雰囲気恐ろしいのに対し、ソラオソロシはソラ（実態がないもの）に襲われそうな意識をいう。露見を警戒し、源氏が近づく隙を与えない。帝に対しても、事実を帝に知らせることができない以上、藤壺に向けられた天の制裁を避けられないと思うのが自然であろう。宿曜の予言を知らないだけ、救い様がない。

源氏は△夢の告げ▽を得る。

「中将の君も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなう思しもか



けぬ筋のことを合はせけり。「その中に違い目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて、「みづからの夢にはあらず、人の御事を語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな」とのたまひて、心の中には、いかなることならむと思しわたるに、この女宮の御事聞きたまひて、もしさるやうもやと思しあはせたまふに、いとどしくいみじき言の葉尽くし聞こえたまへど命婦も思ふに、いとむくつけうわづらはしさまさりて、さらにたばかるべき方なし。はかなき一行の御返りのたまさかなりしも絶えはてにたり。」

夢占いのいう「及びなう思しもかけぬ筋」とは、「帝の実父になる」という類のことであろう。夢の告げを源氏は天が源氏にだけ授ける情報と理解し、天は父帝を守っていると信じようとしたであろう。夢占いは「つつしめ」ともいう。夢の告げは語れないが、初めて父になる喜びと興奮を相手の女性と分かち合いたいのが本能である。藤壺の仲介者である命婦は、藤壺懐妊を知って、「いとむくつけう（気味ワルク）わづらはしさまさりて（相手ニナルノガ一段ト面倒ニナリ）」源氏を寄せ付けない（帝のさぐり（実質確認）は既にあつたか）。源氏は、喜びを分かち合うべき人と会うこともできない。

③（七月藤壺参内）

「めづらしうあはれにて、いとどしき御思ひのほど限りなし。∴例の明け暮れこなたにのみおはしまして、御遊びもやうやうをかしき空なれば、源氏の君もいとまなく召しまつはしつつ、御琴笛などさまさまに仕うまつらせたまふ。いみじうつつみたまへど、忍びがたき気色の漏り出づるをりをり、宮もさすがなる事どもを多く思しつづけけり。（同「二三」）」

帝は信じて疑わない。幼少年時代と同様、藤壺と源氏に琴笛の合奏をさせる。二人が「琴笛の音に聞こえ通（桐壺「一七」）」のを聞いてきた帝である。源氏の笛に「忍びがたき気色の漏り出づる」折々があり、藤壺の「さすがなる事どもを多く思しつづけけり」に、胸一つに秘めている（宿曜の予言の顕現化）への自信を、一段と強め、万事理想的だと安心している

帝を読み取るべきであろう。

④ (試楽青海波を見て)

「：詠はてて袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。春宮の女御、かくめでたきにつけても、ただならず思して、「神など空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」とのたまふを、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり。藤壺は、おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えましと思すに、夢の心地なむしたまひける。

宮は、やがて御宿直なりけり。「今日の試楽は、青海波に事みな尽きぬな。いかが見たまひつる」と聞こえたまへば、あいなう御いらへにくくて「ことにはべりつ」とばかり聞こえたまふ。「片手もけしうはあらずこそ見えつれ。：試みの日かく尽くしければ、紅葉の蔭やさうざうしくと思へど、見せたてまつらんの心にて、用意させつる」など聞こえたまふ。(紅葉賀「二」)

青海波のクライマックスで源氏の顔がキラキラと光るのは、源氏の内面の生の充実感の反映である。それを弘徽殿は「うたてゆゆし」と呪う。藤壺は「おほけなき(帝に遠慮もせず藤壺に接近する)心のなからましかば」と思いながら実は恍惚となった。その夜、帝に源氏の舞台の感想を聞かれて藤壺は「ことにはべりつ」の一言であった。短すぎる返事に帝は事実を読み取り、満足し、長々と喋って、今日の試楽は源氏の青海波を藤壺に「見せたてまつらんの心」でやったのだという。宿曜を信じて泰然自若の帝である。

⑤ (三条宮訪問)

里下がり中の藤壺を見舞った。その源氏に應對する三条宮の女房達の態度が「けざやかに(ハッキリト線ヲ引ク)」になった。源氏は藤壺に会えないまま時が流れる。ケザヤカにすつきりさせる藤壺である。

「はかなの契りやと思し乱ること、かたみに尽きせず。(同「五」)」

三条宮に年賀。「人々めできこゆるを、宮、几帳の隙よりほの見たまふにつけても、思ほすことしげかりけり。(同「七」)」

「二4」(冷泉の誕生)

①(三条宮での出産)

「二月十余日のほどに、男皇子」誕生。源氏が見たがっても藤壺は対面させない。

「さるは、いとあさましうめづらかなるまで写し取りたまへるさまを、違ふべくもあらず(同「八」)」

と、新生児は動かぬ証拠と言えそうなほど源氏に似すぎている。藤壺は

「あやしかりつるほどのあやまりをまさに人の思ひ咎めじや、さらぬはかなきことをだに疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにかと思しつづくるに、身のみぞいと心憂き。」

と、藤壺・源氏を目の敵にする弘徽殿の詮索を案じる。帝も源氏も皇子もこれでよいが、自分は帝に対してこれでは済むまいと心を痛める。

面会を求める源氏に王命婦は「…こや世の人のまどふてふ闇(コに子をかける)」と打ち明けた返し。源氏は夢の告げにより事態は解っていた。隠し遂せない命婦の正直さを警戒するか。

②(皇子参内)

「四月に内裏へ参りたまふ。ほどよりは大きにおよすげたまひて、やうやう起きかへりなどしたまふ。あさましきまで紛れどころなき御顔つきを、思しよらぬことにしあれば、また並びなきどちはげに通ひたまへるにこそはと思ほしけり。」

新皇子の顔を見た帝桐壺の心中をいう地の語りである。「思しよらぬことにしあれば」を、宿曜の予言に従ったことは、す

べて、人智の及ばないこと、天のみの知ることの意ととる。筆者は今まで、この「思しよらぬことにしあれば」が疑問であつた。藤壺・源氏の二人をよく見抜きながら、知らぬ存ぜぬとシラをきると見るのでは落ち着かない。宿曜の予言を踏まえなければ解釈のつかない一句である。

「いみじう思ほしかしづくこと限りなし。源氏の君を限りなきものに思しめしながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、あかず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておはするを御覧するままに、心苦しく思しめすを、かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、瑕なき玉と思ほしかしづくに、宮は、いかなるにつけても、胸の隙なくやすからずものを思す。」

帝桐壺は、源氏を立太子させることができなかつたのが口惜しく（コト志ニ反シテ残念デタマラズ）、ただ人には過ぎていゝる立派な人相に成長するのを、帝の責任として、見るに忍びない思いであつたところに、源氏に生き写しの、藤壺腹の皇子を得て、これこそと大事にする。

対するに藤壺は、帝が喜ぼうと何であろうと、ゴシップをたてないように気を使い、隙を見せない。

「例の、中将の君、こなたにて御遊びなどしたまふに、抱き出でたてまつらせたまひて、「皇子たちあまたあれど、そこをのみなむかかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、みなかくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじうつくしと思ひきこえさせたまへり。」

帝が皇子を抱いて、源氏・藤壺二人に見せる。「いとよくこそおぼえたれ」——藤壺が動かぬ証拠と恐れる皇子と源氏との瓜二つぶりを、帝は似ていいいと喜ぶだけである。

「中将の君、面の色かはる心地して、恐ろしくも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし。物語などして、うち笑みたるがいとゆゆしうつくしきに、わが身ながらこれに似たらむは、い

みじういたはしうおぼえたまふぞあながちなるや。」

源氏がはじめて見る我が子である。「面の色かはる心地」の源氏を父帝は見ている。源氏の心中、オソロシは似すぎに実父露見の危険を感じての意識。カタジケナクモは我が子と信じて疑おうともしない父帝の態度に対する敬意。ウレシは実子を得たこと、父帝が彼に満足して讃めていること。アハレは子に対し父と名告れない感慨か。

「宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。中将は、なかなかなる心地のかき乱るやうなれば、まかでたまひぬ。(同「九」)」

源氏と二人一緒に、帝の腕の中の我が子を見なければならぬ藤壺は「わりなく(筋ガ立たズ)かたはらいたきに(ソノ場ニイタタマレズ)、汗(冷汗)もながれてぞおはしける。」であった。帝の前で正直な二人である。場面は「御遊び」の場―帝が設定した、幼い頃からのなじみの場―である。

宿曜の予言の顕現化を全うしようとする帝桐壺によって、藤壺も源氏も正当化されている。しかし、予言を知らない藤壺には帝桐壺の態度は、すんなりとは通じない。藤壺は自己に対して厳しく厳しくなる。

### 三 桐壺帝の讓位、遺言と朱雀の意識構造

「三一」(桐壺帝讓位の準備)

#### ① (藤壺立后)

「七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君宰相になりたまひぬ。帝おりゐたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、…母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。(紅葉賀「一六」)」

冷泉立坊に先立ち、藤壺を中宮に立てる。立后後最初の参内の儀式に源氏も宰相として参列。

「わりなき御心には、御輿のうちも思ひやられて、いとど及びなき心地したまふに、すずろはしきまでなむ。

尽きもせぬ心の闇にくるるかな雲居に人を見るにつけても

とひとりごたれつつ、ものいとあはれなり(同「一六」)

源氏は立后した藤壺に距離の隔たりを痛感する。

② (冷泉・源氏の相似と藤壺の恐れ)

「皇子は、およすげたまふ月日に従ひて、いと見たてまつり分きがたげなるを、宮いと苦しと思せど、思ひよる人なきなめりかし。(同「二七」)

冷泉は成長するにつれて源氏にますます似てくる。言い掛かりを付けて陥れるには格好の材料である。藤壺は冷泉出生時に抱いた危惧(前述「二四」①)が消えていない。右大臣・弘徽殿勢力への警戒が強い。対立勢力をリアルに見ている。一方、現実には、源氏に似た冷泉はすんなりと受け入れられている。帝王となるべき資質のある源氏を春宮にできず、無念の賜姓源氏を断行した帝桐壺が、源氏の再来としか思えない新春宮候補に恵まれたのを、人々は素直に受け入れている。こういう類似に当時の人々は△天の意志▽を感じたのではないか。

③ (花宴の藤壺)

「かうやうのをりにも、まづこの君を光にしたまへれば、帝もいかでかおろかに思されむ、中宮、御目のとまるにつけて、東宮の女御のあながちに憎みたまふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづから思しかへされける。

おほかたに花の姿を見ましかば露も心のおかれまじやは

御心の中なりけむこといかで漏りにけん。(花宴「二」)

藤壺の歌であるが、慎重すぎるほど慎重な藤壺の緊張が弛んでいる。中宮となって、弘徽殿に対しても警戒をするだけでなく、より大きな立場から見直そうと試みて、弘徽殿が源氏を憎むのを批判し、藤壺自身の源氏の徹底排除も反省する。としても、「おほかたに…」の歌が流れたのは理解しにくい。この歌こそ中宮を中傷しようとするれば有力な材料となり得る。この種の危機感花宴巻の座標軸か。現実には歌とは別で、その夜「語らふべき戸口も鎖してければ」で源氏は排斥された。

〔三二〕（桐壺帝讓位後）

「世の中変りて」つまり桐壺帝が春宮朱雀に讓位、冷泉が春宮となる。源氏は「なほ我につれなき人の御心を尽きせずのみ思し嘆く」。藤壺は「今はまして隙なう、ただ人のやうにて（桐壺院に）添ひおはします」。院も藤壺も

「をりふしに従ひては、御遊びなどを好ましう世の響くばかりせさせたまひつつ、今の御ありさましもめでたし。ただ春宮をぞいと恋しう思ひきこえたまふ。御後見のなきをうしろめたう思ひきこえて、大将の君によろづ聞こえつけたまふも、かたはらいたきものからうれしと思す。（葵「一一」）」

春宮は内住みである。その宮中は、新帝母弘徽殿（今后）が「内裏にのみさぶらひたまへば（新帝朱雀に付き添って）、立ち並ぶ人なう心やすげなり。（葵「一二」）」と、右大臣・弘徽殿勢力が実権を握る。物語は、春宮の周囲の状況の詳細を殆ど語らない（後の語りで源氏・藤壺の他には御乳母と王命婦と夜居僧都とが守ったという）。

〔三三〕（桐壺院の遺言）

宿曜の予言の顕現化を進めてきた桐壺院に残された問題は、春宮の即位である。

院の帝朱雀への遺言は「春宮の御事をかへすがへす聞こえさせたまひて」から始まる。「御事」は即位の実現にはかならない。「つぎに大将（源氏）の御事」を、

「はべりつる世に変はらず、大小のことを隔てず何ごとも御後見と思せ。齡のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をさせせむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな（賢木「八」）」

と遺言した。「はべりつる世に変はらず」とは、桐壺院がそうであったと同じ様に、光源氏を「御後見」とし、光にリードしてもらって政治をせよの意。光を△ただ人▽にしたのは、朱雀のために、桐壺に代わっての後見をさせるためだったという（それが春宮即位に通じる道である）。帝桐壺の賜姓源氏の具体的目的がこの遺言で語られている。「かならず世をたもつべき相ある人なり。」と院が朱雀にいうのは、源氏に対する個人感情ではなく、△天子に期する天の意志▽の伝達として重要である。

またの日、東宮（数え年5歳）・中宮・源氏が見舞う。

「（春宮は）何心もなくうれしと思して見たてまつりたまふ御気色いとあはれなり。中宮は涙に沈みたまへるを、見たてまつらせたまふも、さまざま御心乱れて思しめさる。よろづのことを聞こえ知らせたまへど、いともはかなき御ほどなれば、うしろめたく悲しと見たてまつらせたまふ。大将にも、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことをかへすがへすのたまはず。：飽かぬほどにて帰らせたまふを、いみじう思しめす。（同「九」）」

問題とすべきは、泣き沈む中宮を見ての院の心中「さまざま御心乱れて思しめさる」であろう。冷泉の誕生は、前述してきたが、宿曜の予言の顕現化をめざす桐壺院が幼少の源氏と藤壺とを特別扱いして下地を作り、宿曜が源氏を導いたのであって、いわゆる△密通▽で片付くことではない。桐壺は理想どおりにことが運んだのを喜んできた。源氏は別に夢の告げを得た（若紫）。藤壺は宿曜の予言を知らない。院没後の語りであるが、桐壺院に対する藤壺の意識は、「いささかも気色を御覧じ知らずなりにしを思ふだにいと恐ろしきに（同「二六」）」である。藤壺の意識がそうであるのが院には解って



いる。藤壺からすればこれが院に対しての最大の苦しみであろう。桐壺院からすれば、弘徽殿・右大臣が健在である、朱雀が遺言を守れるかどうか、桐壺死後の政界勢力の変化の中で藤壺が受けるであろう冷遇・迫害的なもの、春宮をどう守るか、「さまざま」であったであろう。

源氏への遺言は「朝廷に仕えまつりたまふべき御心づかひ、この宮（春宮）の御後見したまふべきこと」である。なお、源氏が宿曜の予言を何時知ったか、明らかになし得ない。

#### 「三4」（院崩御、遺言と朱雀の意識構造）

弘徽殿が見舞わないうちに院は亡くなった。弘徽殿は従うべき遺言を聞いていない。不幸にしてではなく、遺言による束縛を回避したのではなかったか。

「後の御心いちはやくて、かたがた思しつめたることどもの報いせむと思すべかめり。事にふれてはしたなきことのみ出で来れば、かかるべきことは（源氏は）思ししかど、見知りたまはぬ世のうさに立ちまふべくも思されず。（同「一二二」）」

弘徽殿の即断即決でことが動く。邪道にせよ、抜群の政治力と言え言える。源氏も立ち後れたのであろう。

肝心の帝であるが、桐壺院の遺言に、「さらに違へきこえさすまじきよしを、かへすがへす聞こえさせたまふ。（同「八」）」であったが、「帝は、院の御遺言たがへずあはれに思したれど、…母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず、世の政御心になはぬやうなり。（同「二五」）」と地の文はいう。

源氏は帝朱雀に会う。「よろづの御物語」を交わして、

「中宮の今宵まかでたまふなる、とぶらひにもものしはべらむ。院ののたまはせおくことはべりしかば、また後見仕うまつる人もはべらざるに、東宮の御ゆかり、いとほしう思ひたまへられはべりて」と奏したまふ。（帝）「東宮をば今の

皇子になしてなどのたまはせおきしかば、とりわきて心ざしものすれど、ことにさし分きたるさまにも何ごとをかはとてこそ。年のほどよりも、御手などのわざと賢うこそものしたまふべけれ。何ごとにもはかばかしからぬみづからの面おこしになむ」とのたまはすれば…(同「二三」)

源氏が「院ののたまはせおくこと」と院の遺言を話題に持ち出し、「後見」を言葉に出して言うのに対し、朱雀は「ことにさしわきたるさまには何ごとをかは」という。源氏に対する朱雀の態度は、この面談に際しても、「尚侍の君の御事も、なほ絶えぬさまに聞こしめし、気色御覧ずるをりもあれど、「何かは、今はじめたることならばこそあらめ、ありそめにけることなれば、さも心かはさむん、似げなかるまじき人のあはひなりかし」とぞ思しなして、咎めさせたまはざりける。」である。源氏を立てる朱雀が、桐壺院の遺言を、源氏相手にそう無視できるとは考えにくい。朱雀は「東宮をば今(今上)の皇子になしてなどのたまはせおきしかば」と言うが、宿曜の予言に従う桐壺帝がそう言うはずがない。非常識である。桐壺院の遺言の意味が朱雀に理解出来ているのかどうか。桐壺帝が源氏を朱雀の後見にと決めていたのは、宿曜の予言もさることながら、朱雀に対するそれなりの認識と判断があつてのことと見なければなるまい。それを前提としない限り、桐壺院の遺言は朱雀の人権無視となりかねない。この面談で朱雀は、「よろづの御物語、書の道のおぼつかなく思さるることどもなど(源氏に)問はせたまひて」「かの齋宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど語らせたまふに」であり、新春宮(冷泉)を「何ごとにもはかばかしからぬみづからの面おこしになむ」という。「何ごとにもはかばかしからぬ」が朱雀の自覚である。故院の遺言を胸に、朱雀との政治の話を求めていたであろう源氏は、朱雀相手に手の施し様もない。

仮に、弘徽殿女御と父右大臣とが桐壺帝生存中に他界していれば、朱雀がどうであろうと、源氏は父帝の遺言を実現でき、春宮冷泉への政治のバトンタッチは、桐壺帝の筋書き通りに行なえ、朱雀も救われたであろう。最悪の事態に至らし

めるのが、作者の構想する「末世」である。

ちなみに、朱雀が明石から帰京した源氏を迎える場面をとりあげたい。

「わたつ海にしなえうらぶれ蛭の子の脚立たざりし年はへにけり

と聞こえたまへば、いとあはれに心恥づかしう思されて、

宮柱めぐりあひける時しあれば別れし春のうらみのこすな

いとなまめかしき御ありさまなり。(明石「二〇」)

自分を蛭子（最初の子であったが、足が立たなかつたので葦舟に入れて流された）に喩えて、三年経った今朱雀は？ と言いたげな源氏の辛辣さであるが、朱雀の返事は、男女和合（朧月夜問題）の域を出ず、源氏に求めるのは「恨み残すな」である。ウラムは、本心ヲ解ッテホシイを原義とし、本心が通じるはずなのに通じていないという意識を基盤とする。あくまで個人レベルの感情である。そういう朱雀を地の文は「いとなまめかしき（常トハ違ッタ、シットリトシタ美シサガアル）御ありさまなり」という。以上、朱雀の意識構造の基底として留意したい。

藤壺と源氏にもどる。藤壺も源氏も春宮を守らなければならない。藤壺が春宮のために頼れるのは源氏だけであるが、源氏との仲を取り沙汰されれば、事は春宮に及びかねない。藤壺が恐れるのは、春宮と源氏とが似すぎていることであつた。

「（東宮）おとなびたまふままに、ただかの御顔を脱ぎすべたまへり。…いとかうもおぼえたまへることそ心憂けれど、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしさのそら恐ろしうおぼえたまふなりけり。(同「二八」)

藤壺は桐壺院の一周忌の法要に続いて法華八講をし、果ての日に出家した。東宮のために頼れるのは源氏一人、源氏を避けては春宮を守れない、源氏と藤壺との仲を中傷に利用されないためには、出家以外にない、が藤壺の判断であつたであ

ろう（同「二七」）。

「世の中厭はしう思さるにも、東宮の御事のみぞ心苦しき。「母宮をだにおほやけ方さまにと思しおきてしを、世のうさにたへずかくなりたまひにければ、もとの御位にてもえおはせじ。我さへ見たてまつり棄てては」など、思し明かすこと限りなし。（同「二九」）」

藤壺に出家されて、源氏は故院の藤壺立後の意図がどうなるのか熟慮し、自分の役割を再認識する。藤壺の出家は、源氏の現世見限りの歯止めとなった。

「参りたまふも、今はつつましき薄らぎて、御みづから聞こえたまふをりもありけり。思ひしめてしことは、さらに御心に離れねど、ましてあるまじきことなりかし。（同上）」

出家して藤壺は、源氏の相談役におさまる。故院の遺言の実現のみを願い、仏を祈る。

「わが身をなきになしても春宮の御世をたひらかにおはしまさばとのみ思しつつ、御行ひたゆみなく勤めさせたまふ。人知れずあやふくゆゆしく思ひ聞こえさせたまふことしあれば、我にその罪を軽めてゆるしたまへと仏を念じきこえたまふに、よろづを慰めたまふ。大将も、しか見たてまつりたまひて、ことわりに思す。（同「三一」）」

#### 四 夜居の僧都の役割

朱雀帝は桐壺院の遺言に既に背いている。朧月夜との関係を弘徽殿方が源氏追放の材料とし、源氏が須磨に退く。藤壺の恐れは表面化しなかった。天変を期に桐壺院の亡霊が活躍して冷泉即位に至り、桐壺院（天）に背いた右大臣勢力は滅ぶ。ここでは、夜居の僧都による冷泉に対する出生の事実の証しと、仏法の加護とを確かめておきたい。

〔四一〕（天変と藤壺の死）

「その年、おほかた世の中騒がしくて、公さまに物のさとししげく、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ世の人おどろくこと多くて、道々の勘文ども奉れるにも、あやしく世になべてならぬことどもまじりたり。内大臣（源氏）のみなむ、御心の中にわづらはしく思し知ることありける。（薄雲「一二」）」

「内大臣のみ：思し知ること」が問題である。宿曜の予言に関わることで、源氏が「わづらはしく（相手ニナルノガ面倒）」と感ずることとは、朱雀在位中、桐壺院の遺言に源氏が応えることができなかつたことではないか。桐壺院が源氏を「ただ人」にしたのは、朱雀への遺言によれば、朱雀帝の後見を源氏がすることであつた（前述「三三」）。それが実現されていけば、朱雀帝の時代に源氏は天の意向に従えた。言い換えれば、皇位のバトンタッチは実質父から子へとなり、冷泉の立場の矛盾は実質的にさして問題とならなかつたのではないか。朱雀には天変のさとしが通じない。若菜上巻に至つて、朱雀院が夕霧に「：年ごろ事にふれて、その（須磨退去）恨み遣したまへる気色をなむ漏らしたまはぬ。：」と云うのに對し、夕霧は「：『かく（周知ノヨウニ）朝廷の御後見を仕うまつりさして、静かなる思ひをかなへむと、ひとへに籠りるし後は、何ごととも知らぬやうにて、故院の御遺言のごとも仕うまつらず、（朱雀が）御位におはしましたし世には、齡のほども、身の器物も及ばず、賢き上の人々（弘徽殿など）多くて、その心ざし（朱雀の後見）を遂げて御覽せらるることなかりき。：（若菜上「三三」）」と云う。

一方、藤壺は宿曜の予言を知らない。三十七歳の厄年。重態になる。

「御心の中に思しつづくるに、高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心の中に飽かず思ふことも人にまさりける身と思し知らる。上（冷泉）の、夢の中にも、かかることの心を知らせたまはぬを、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて、これのみぞ、うしろめたくむすばはれたることに思しおかるべき心地したまひける（同）」

冷泉に源氏を実父と知らせないことが苦しく、往生の絆しになりそうな気がしている。臨終を見舞う源氏に、

「院の御遺言にかなひて、内裏（冷泉）の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど…」  
と言ひ残して果てる。

物語は私情を捨て公人（中宮）に撤した藤壺の生きざまを、

「御心ばへなどの、世のためにもあまねくあはれにおはしまして、…人の仕うまつることをも、世の苦しみとあるべきことをばとどめたまふ。功德の方とても、…ただもとよりの財物、えたまふべき年官、年爵、御封のもの、さるべき限りして、まことに心深きことどもの限りをしおかせたまへれば…」  
と語る。

〔四二〕（夜居の僧都の証し）

藤壺の母后・藤壺・冷泉に御祈禱の師として仕えた七十歳になる僧都が、藤壺の四十九日後も源氏の勧めで、冷泉の夜居の僧として奉仕していた。

人のいない「静かなる暁」に、僧都は冷泉帝にその出生の秘密を奏上する。故桐壺院・故中宮・源氏のために、秘密が露見しないように、藤壺懐妊時に祈禱を依頼され、源氏の須磨退去に際して重ねて依頼され、それを聞いて源氏からも依頼され、冷泉即位まで祈禱を続けた。祈禱が効を奏し、仏天の加護があったからこそ、冷泉の即位が実現できた。打ち明ける理由は、「知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく」「仏天の告げあるによりて」である。「なにがしと王命婦とより外の人、このことのけしき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこの気なり。」という。僧都が打ち明けなければ、冷泉を含めて当事者達を救える人はいないと、僧都は仏天に対する責任を感じている。

僧都の意識は、まさに藤壺の恐れをそのままである。藤壺の死後の救いのためにも、僧都としては打ち明けなければな

らなかった。出家して源氏と冷泉を守ろうとした藤壺の祈りに仏天が応えて、冷泉が即位に至れたのも確実である。疎外に疎外を重ねられて、祈る以外にすべのなかった藤壺と源氏であった。

ところで、僧都のこの意識は、事実関係において、宿曜の予言を知る桐壺院・夢の告げを得た源氏の意識とは根底においてズレがある。冷泉が即位に至れたのは桐壺の亡霊の活躍が大きい。僧都はそれを知らない。

打ち明けられた若い帝冷泉の苦悩が残る。藤裏葉巻に至って、源氏は「太上天皇にならずらふ御位得（藤裏葉「一二」）、さらに六条院行幸において、「（源氏が）御座二つよそひて、主の御座は下れるを、宣旨ありて（源氏の公的立場を朱雀の上座に）直させたまふほど、めでたく見えたれど、帝はなほ限りあるるやるやしさをつくして見せたてまつりたまはぬこととをなん思しける。（藤裏葉「二五」）」となった。

後日、源氏の夢にあらわれた藤壺は、「いみじく恨みたまへる御気色にて、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ。」とのたまふ。（朝顔「一〇」）」と、成仏できていない。

物語が語る今一人の△中宮の夜居の僧▽明石中宮の横川の僧都の出現を待たなければ、女人往生は実現しない。<sup>(2)</sup>

〔注〕

(1) 二松学舎大学人文論叢第67輯二〇〇一年十月

(2) 望月郁子「女人往生への道―明石中宮の役割と浮舟の受難」大学院紀要二松15二〇〇一年三月